

## イベント取材の夢が消えた後 (その3)

神谷 直亮

6月にシンガポールで開催される予定であった「Satellite Industry Forum 2020」と「CnnectechAsia/BroadcastAsia/CommunicAsia2020」が中止となり、本稿執筆時点の7月10日にかけて巣ごもり状態が続いた。この間にプロ野球セントラル・パシフィック両リーグが6月19日に開幕して、20日の朝刊から新聞に活気が戻った。新型コロナウイルス感染拡大で、当初予定より約3か月遅れての開幕で、かつ6試合とも公式戦史上初の無観客で行われた。スポーツ欄の記事の中で特に目立ったのは、大活躍した坂本選手（巨人）と鈴木誠選手（広島）の大きなカラー写真が20日付けの読賣新聞朝刊に掲載された。

また、6月19日には、5月25日の緊急事態宣言全面解除後も自粛を求められて

いた首都圏1都3県、北海道の移動も解禁され日本全国の往来が自由になった。これを踏まえて、県境越えの記事が多く見られた。朝日新聞は、東京湾アクアラインの千葉県側の玄関口、木更津市の商業施設での賑わいを伝えた。一方、読賣新聞は、三重県伊勢市の伊勢神宮内宮前のおほらい町に、県外から多くの参拝客らが詰めかけた様子をレポートしている。

この後、7月4日にサッカーJ1リーグが4か月ぶりに再開し、7月5日の朝刊は無観客9試合の様態を伝えた。得点後のパフォーマンスについて、Jリーグは最低1メートルの距離を空けるよう求めているが、「気持ちが高ぶる選手同士がお互いに接近してしまうシーンが相次いだ」という。10日からは徐々に観客を迎えることになっているが、どのような展開になるのか少々心配だ。

毎回、新型コロナウイルスの話題で恐縮だが、7月4日付け朝日新聞の朝刊に思わず引き込まれてしまった。「武漢 最初の感染者を追う」という見出しのこの記事は、平井良和記者による現地取材で、臨場感に満ちた写真と地図も掲載されている。この記事によれば、「世界をのみこんだ新型コロナウイルスは、湖北省武漢市の華南海鮮卸売市場で発生した。5万平方メートルの敷地を誇るこの市場は、魚介、干物、食肉などを売る店が千軒以上ひしめく巨大市場であった」という。最初の感染者は誰かという点に関しては、3説に言及している。第1説は、12月11日ごろ市場でエビを売っていた女性。第2説は、12月初めころ魚を仕入れに市場に来ていた斉という名の50代くらいの男性。第3説は、中国当局が認定した12月8日の発症例第一号である。しかし、「市場で働いていた人達は、当時を語りたがらず未だ特定できないままで」という。

新型コロナウイルス以外では、毎日新聞が「宇宙新時代」という4回シリーズの記事を6月26日、27日、7月4日、8日号に掲載した。久しぶりに力の入った内容で、第一回の大見出しは「ごみと衛星 衝突危機」だ。宇宙ゴミに関しては、「地球からの観測を踏まえた推定によると、10cm以上が約3万4,000個、1cm～10cmが約90万個、1mm以上なら約1億3000万個に達する」という驚異的な数字を挙げ、ぶつかったときの衝撃については、「1mm大でも野球のボールが時速100kmでぶつかった時と同じ、1cmなら小型車が時速70～80kmで衝突したのと同じ」と述べている。

このような宇宙における異常事態を踏まえて、記事のハイライトは国内外ベンチャー企業が使用済み衛星の除去や、デブリを新たに生まない対策の構築に乗り出して



写真1 毎日新聞は、6月26日から4回シリーズで「宇宙新時代」を多角的な見地からレポートした。



写真3 読賣新聞は、同社のオンラインの特設ページで「羽生結弦展2019-20 前編」(会期：7月1日～8月2日)を開催している。

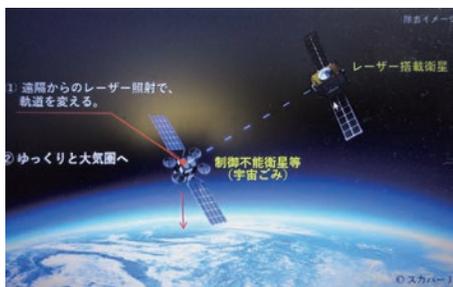


写真2 スカパーJSATが、理化学研究所、宇宙航空研究開発機構、九州大、名古屋大と産学官連携で開発するというレーザーによる宇宙ゴミ除去システムのイメージ図。(出典：スカパーJSATのHP)



写真4 「羽生結弦展2019-20 前編」の後半では、写真を撮影した読賣新聞東京本社写真部の若杉和希記者の興味深い苦労話を視聴できた。

いと「終活ビジネス始動」に触れている。具体的に日本で始動している事業者として、アストロスケール、ALE（エール）、スカパーJSATを挙げ、スカパーJSATは、「理化学研究所、宇宙航空研究開発機構、九州大、名古屋大との産学官連携で小型衛星にレーザーを発する装置を積み、デブリに微弱なレーザーを当てることにより大気圏に再突入させるシステムを開発する」という。

なお、第二回の大見出しは、「敵は宇宙人ではなく中露」、第三回は「GPS異常で船が陸に」、第四回は「眠る金脈の覇権争い」で、宇宙の軍事利用、サイバー攻撃、資源採掘権などをめぐる現状を幅広く取り上げて、宇宙ビジネスの将来を喝破している。日本の課題については、宇宙資源採掘権を認める法律案の整備、小型衛星打ち上げロケットの開発など、特に業界の裾野を拡大する必要性に言及している。

雑誌では、文芸春秋7月号に掲載された石原慎太郎氏の「予期せぬ出来事—私の闘癌記—」と清原和博氏の「薬物依存症との1595日」を真剣になって読んだ。「私の闘癌記」は、専門外の医師の炯眼で発見されたサイズ約2センチの膵臓癌を現代医学の最先端技術の重粒子線治療により完治した体験談である。石原氏は、「高齢化が進み日本人の三人に一人が癌で死ぬという現状に対処するに最適な技術を運営して国民を救う最有効な手立てとしての重粒子線を駆使する施設を国家はコロナ騒ぎが収まった後に最優先の事業として行うべき」と建言している。

「薬物依存症との1595日」は、2016年5月31日に覚せい剤取締法違反により懲役2年6か月、執行猶予4年の有罪判決を受けた清原氏のその後1595日に及ぶ生々しい体験談である。薬物への欲求と鬱病との戦いの中で、救いは「ふたりの息子との再会」だったという。特に都内の硬式

野球チームに所属している次男がホームランを打った時の黒いバットをもらってこの上ない救いを見出している。最後に、これからの生き方として、「依存症予防教育アドバイザーの資格」と「高校野球を指導する資格」を取ることを真剣に考えていると述べており、ぜひ実現してほしいものだ。

文芸春秋7月号には、新型コロナウイルスの話題もたくさん掲載された。中でも「ワクチンなしに日常は戻らない」というタイトルでビル・ゲイツ氏が強調した「新型コロナウイルスのパンデミックの主たる出来事は、これから起こるのだ」という警鐘には考えさせられた。つまり、同氏は、「人類は、パンデミックに打ち勝つと信じている。しかし、それは、人口の大半が予防接種を受けることができからの話だ」という。

そこでゲイツ氏は、「通常、ワクチンの開発には数年以上にわたるプロセスが必要になるが、一刻を争う」として、期待される7種類のワクチンへの投資を決断した。最終的には、一つもしくは二つを選ぶことになるので数十億ドルの無駄な投資が発生するが、「効果的なワクチンが見つかり早く供給されることで感染症が収束し、経済活動が戻るのなら理にかなっている」と踏み切ったのである。

映像コンテンツに関しては、読賣新聞オンラインの特設ページで開かれている「羽生結弦展2019-20前編」（会期：7月1日～8月2日）とJRグループが制作した「さあ、再び始まる列車の旅へ」を楽しんだ。読賣新聞によれば、羽生結弦選手の2019～2020シーズンを振り返る報道写真展を、当初百貨店で開催することを計画していたが、新型コロナウイルスの感染拡大による不安からオンライン上での公開に切り替えたという。

今回公開された「羽生結弦展2019-20

前編」は、「秋によせて/OTONAL」「バラード第一番」「EXHIBITION」の3部構成で、全22枚からなるオンライン写真展である。読賣新聞東京本社写真部の若杉和希記者が撮影したものの中から厳選して紹介している。

第一部の「秋によせて/OTONAL」では、オータムクラシックSP（2019年9月カナダ）、グランプリファイナル（2019年12月イタリア）、全日本選手権SP（2019年12月東京）、NHK杯SP（2019年11月札幌）での活躍ぶりを8枚の写真で懐かしく蘇らせる。

第二部の「バラード第一番」は、4大陸選手権SP（2020年2月、韓国）を制した4枚の美しい写真で構成されている。ハイライトとも言える第三部の「EXHIBITION」は、「春よ、来いNHK杯（2019年11月札幌）」、「SEIMEI オールジャパン・メダリスト・オン・アイス（2019年12月東京）」、「Hope & Legacy 四大陸選手権（2020年2月韓国）」で撮影された9枚の傑作だ。

なお、本展には若杉記者の詳しい解説コーナーも設けられており、羽生選手の4回転ループ、4回転ルッツ、4回転トゥループ+3回転トゥループの連続写真も紹介するという念の入れようであった。

「さあ、再び始まる列車の旅へ」は、北海道の「白金青い池」から始まって佐賀県の祐徳稲荷神社まで、1分間でめまぐるしく展開するコンテンツである。この間に、日本平、阿蘇、五稜郭、岐阜城、姫路城、瀬戸大橋などのスライドが次々に出現し、まさに「レールがつなぐ国——日本」の旅の総集編である。特に目を奪われたのは、筆者にとっての憧れの地「五稜郭公園の桜」だ。

Naoakira Kamiya  
衛星システム総研 代表  
メディア・ジャーナリスト